

現実社会で必要となる読解力の向上を目指した 研修デザイン

－「JFS 読解活動集」を用いたタイ中等教育機関の教師研修の実践から－

ナリサラー トンミー・西島阿弥子・アーパーポーン ナオサラン
飯尾幸司・プリヤワン ポーシッリンパグン・奥野紗衣

1. はじめに

国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）では、「タイ人中等教育機関教員の日本語運用能力の向上とネットワークの形成」を目的とし、2015年から「日本語ブラッシュアップ研修」（以下、NBU）を実施している。NBUは、2020年のコロナ禍を機にその研修内容、目標の見直しを行った。本稿では、2021年4月に実施したNBUオンラインについて報告する。本研修は、課題遂行型教材「JFS 読解活動集」を用い、「現実社会で必要となる読解力」の向上と、「研修後も自ら学び続ける教師」の育成を目指して実施した。研修概要と研修デザインの工夫について述べ、研修の成果と課題を考察する。

2. 研修実施の背景

2019年までのNBUは、学期休暇期間の4月と11月の年2回、約1か月間、バンコクで対面集合研修として実施していた。延べ参加者数は181名である。日本語運用能力向上を目標に、『まるとと 日本のことばと文化 初中級 (A2/B1)』（国際交流基金 2015）を用いた「総合クラス」や、日本語能力試験（以下、JLPT）対策の市販教材を使った「読解」「聴解」「漢字・語彙」の技能別の授業を実施していた。研修後にはJLPTのN3の受験を課し、参加者同士が学び合い、日本語学習動機を高められることから、参加者からの評価は高かった。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、対面集合研修の実施が困難となった。そこで、2020年4月のオンライントライアル⁽¹⁾を経て、2020年11月以降は、オンライン研修へと変更した。形式の変更に伴い、研修目標、実施期間、内容の見直しも行った。NBUでは開始以来、研修後も自律的に学ぶことができる「自ら学び続ける教師」の育成を目指していたが、多忙な中等教育機関教員が研修後も日本語学習を継続することは困難であるという課題が見られた。

また、現実社会での日本語の課題遂行能力、特に、読解に苦手意識を抱いている参加者が多く見られ、各研修終了時のアンケートにも「教科書以外の日本語は読む機会がないので、日本語の文章が読めない」「日本語の長い文を見るだけで嫌になる」といった声が挙がっていた。

そこで、参加者同士の学び合いを重視するという従来の研修の良さを活かしながら、「現実社会で必要となる読解力」の向上と、「研修後も自ら学び続ける教師」の育成を目指し、研修をデザインした。なお、本稿では、「現実社会で必要となる読解力」とは、羽吹他 (2021) を参照し、「現実社会で必要となるような具体的な場面において、目的に合った読み方をし、その目的を達成できる課題遂行能力」と定義する。次章から2021年4月に実施したNBUの概要を報告する。

3. 研修概要

3.1 研修目標と概要

中等教育機関の学期休みの2021年4月19日～5月7日の3週間、オンラインで研修を実施した。参加者同士が小グループでの意見交換を通して、お互いを知り、ネットワークを築くきっかけとすること、そして、参加者それぞれが今後「現実社会で必要となる読解力」を伸ばすことを目指した。さらに、参加者が研修でのオンライン同期型授業の時間だけでなく、授業外の自習の時間でも読解に取り組むことで、自習の習慣を身につけ、「研修後も自ら学び続ける教師」となることを目指して、研修の目標を以下のように設定した。

1. JF 日本語教育スタンダード A2/B1 レベルの読解教材で学び、グループワークを通して、現実社会で必要となる読解力を向上させる。
2. オンライン学習によって、参加者それぞれが自分に合った自習の方法を知り、自身の日本語学習に活かせるようになる。

使用教材は、「みんなの教材サイト」⁽²⁾で提供している「JFS 読解活動集」から JF 日本語教育スタンダード A2/B1 レベルの教材を用いた。「JFS 読解活動集」は、「現実社会での課題遂行のための読みをレリアアまたはそれに近い素材を用いて行うもの」(羽吹他 2021: 32) であり、本研修の目標と合致していることから採用した。使用ツールは、学習管理システムとして Google Classroom を使い、オンライン授業では、ZOOM Cloud Meetings を使用した。さらに、講師間の連絡手段として、Microsoft Teams を活用し、資料共有や打ち合わせ等を実施した。研修概要を、以下、表1にまとめる。

表1 研修概要

期間・時間	2021年4月19日(月)～5月7日(金)全36時間、18コマ
使用教材	JFS 読解活動集 (A2 レベル 3 つ、B1 レベル 4 つ)
参加者	タイ人中等教育機関教員 47名 (うち修了者は42名)
参加者の日本語レベル	JLPT N4 相当: 23名、N3 相当: 18名、N2 相当: 5名、N1 相当: 1名
参加者の教授歴	0～5年: 32名、6年～10年: 7名、11年以上: 8名
研修担当講師	6名(JFBKK タイ人専任講師3名、上級専門家1名、専門家1名、指導助手1名)
使用ツール	Zoom (授業)、Google Classroom (学習管理)、Teams (講師間の連絡)

3.2 研修参加者

タイ全国の中等教育タイ人教師を対象に定員40名で募集をし、47名の応募があった。継続的に最後まで参加し、研修を修了したのは42名であった⁽³⁾。参加条件は、日本語初級修了レベルとして JLPT の N4 相当の日本語能力を有するものを優先としたが、N4 相当は23名であったため、それ以外のレベルも受け入れた。参加者の日本語レベルは、表1のとおりで、N4～N1相当と幅がある。また、若手教師からベテラン教師まで幅広い経験を持つ教師が参加した。

3.3 研修担当講師

JFBKK タイ人専任講師が主担当として、研修目標、カリキュラムなどの研修デザインを考えた。その研修デザインをもとに研修担当講師6名（タイ人専任講師3名、日本語上級専門家1名、日本語専門家1名、日本語指導助手1名）全員で研修の方針を話し合った。研修では、「ふりかえりの重視」「読解ストラテジーの意識化」「参加者同士の学び合い」「自ら学び続ける教師の育成に向けた自習」という4つの工夫を行うことに決めた。これについては、4章で述べる。

また、各授業では、6名の講師それぞれが、1コマないし2コマを担当した。授業を担当しない時も授業見学を相互に行い、各授業後に簡単なふりかえりを毎回実施し、次の授業へとつながりを持たせるようにした。

3.4 時間割と学習内容

研修は、以下、図1に示すように、全36時間、18コマ（1コマ2時間。オンライン授業11コマ、自習7コマ）とした。なお、自習時間も研修時間に含めた。

	月	火	水	木	金
	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23
10:00 12:00	使用ツール・使用教材に関する連絡	【1】オリエンテーション、プレテスト、ストラテジーの整理	【2】授業①	【3】授業②	
14:00 16:00					
	4/26	4/27	4/28	4/29	
10:00 12:00		【4】授業③	【5】授業④	【6】授業⑤	
14:00 16:00		自習④	自習⑤	自習⑥	
	5/3	5/4	5/5	5/6	5/7
10:00 12:00			【7】授業⑥	【8】授業⑦	【10】講師からのフィードバック
14:00 16:00			自習⑦	【9】ポストテスト、読む力のふりかえり	【11】研修のふりかえり

図1 時間割

オンライン授業の1コマ目には、研修のオリエンテーションと、「プレテスト・読解ストラテジーの整理」を行った。プレテストは、参加者それぞれが読解で得意、苦手なところに気づくことを目的とし、「JFS 読解活動集」から A2/B1 の教材を用いて実施した。その後、テストの結果をふまえて、研修で頑張りたいことについて参加者それぞれが目標を立てた。そして、目的に合った読み方ができるように、4.2 で述べる読解ストラテジーを研修担当講師が紹介した。

2コマ目～8コマ目の「オンライン授業」は1コマ2時間、合計14時間実施し、「JFS 読解活動集」を用いた読解授業を行った。授業日の午後は、自習の時間とし、1回あたり2時間、合計14時間設けた。自習は、午前中の読解文に関する宿題、翌日の授業の語彙の予習、そして、自分の読みたいものに挑戦する時間とした。

続く、9コマ目では「ポストテスト・読む力のふりかえり」を行った。ポストテストでは、参加者それぞれが自身の読み方が研修を通じてどのように変化したかを確認するため、プレテストと同様に「JFS 読解活動集」を用いて実施した。ポストテスト後には、読む力のふりかえりを参加者それぞれが行い、Google Classroom にある学習記録シートに記入して提出してもらった。10コマ目は、「講師からのフィードバック」である。まず、研修担当講師が、参加者の学習記録シートを読んで、参加者一人一人にフィードバックのコメントを書いて返却した。その講師からのコメントを参加者一人一人が読み、講師と個別にやりとりする時間とした。最後に11コマ目「研修のふりかえり」では、初回に立てた目標に対する確認を全体で行った。

3.5 各授業の流れ

次に、各授業の流れについて述べる。語彙・漢字に苦手意識を抱いている参加者が多かったことから、文章の内容を推測しながら読み進めるうえでヒントになる語彙の知識を補うために、予習を課した。予習の内容は、各授業の前日に講師が用意した「語彙予習シート」に書かれた語彙の意味と漢字の読みを参加者が自分で調べること、そして、語彙の用法を確認できるように Google Forms で作成された「語彙予習クイズ」を解いて、各自答え合わせをすることとした。

オンライン授業の流れは、「【教師用】JFS 読解活動集」を参考に、【1. 準備】【2. 読む】【3. 発展】【4. 自己評価】の4つに分けて進めた。なお、基本的には日本語で授業を行ったが、答え合わせの話し合いや意見を述べる時には、媒介語であるタイ語の使用も可能とした。

まず、前作業の【1. 準備】では、前日に予習した語彙をクラス全体で確認した。次に、これから読むトピックに対して参加者の興味関心を高め、スキーマを活性化するために、「JFS 読解活動集」の【準備】に挙げられた質問に沿って問いかけをし、これから読む記事の内容に関して、参加者間で考えたり、話し合ったりした。次いで、目標 Can-do を提示し、各授業で重視する読解ストラテジーの例を、目標 Can-do に合わせて講師が紹介した。

読解文に対するイメージを十分に膨らませた後、【2. 読む】という本作業に入る。ここでは、

一文一文意味を確認しながら読んでいくのではなく、目的に合わせて必要な部分だけを探して読むことを重視し、まず参加者が一人で読解文を読む時間を5分程度設けた。その後、「JFS 読解活動集」の理解確認のための問題に対する答えを一人で考えてから、参加者同士で答えを確認し、どうしてその答えだと思ったかも話してもらった後に、全体で答え合わせをした。

本文を読んだ後、【3. 発展】で記事の内容について参加者間で感想を言ったり、意見交換をしたりした。最後に、【4. 自己評価】として、Can-do に対して自分がどれくらいできたか、どんな読解ストラテジーを用いたかを確認するために、読むことのふりかえりを行った。

3.6 使用教材

「JFS 読解活動集」の中から、A2 レベル 3 つと B1 レベル 4 つの教材を「①トピック」「②学習目標 (Can-do)」「③長さ・難易度」という 3 つの観点から選んだ (表 2)。

表 2 「JFS 読解活動集」からの使用教材一覧

授業	教材タイトル	JFS レベル	Can-do
1	旅行のパンフレットを読む	A2	旅行パンフレットやガイドブックなどの短い簡単なテキストを見て、主な名所やお店など、 <u>必要な情報を探し出すことができる。</u>
2	和食のメニューを読む	A2	和食の店のメニューを読んで、料理の名前や簡単な説明など、 <u>いくつかの情報を理解することができる。</u>
3	四コマ漫画を読む	A2	簡単なセリフで書かれていれば、四コマ漫画を読んで、 <u>内容をだいたい理解することができる。</u>
4	待ち合わせに遅れることを知らせるメッセージを読む	B1	待ち合わせをしている友人からの遅刻を知らせる短い簡単なメールを読んで、 <u>内容をだまかに理解することができる。</u>
5	フリーペーパーのお店紹介の記事を読む	B1	お店を紹介するフリーペーパーなどの、ある程度長い文章に目を通して、 <u>自分の好みや希望に合った情報を探し出すことができる。</u>
6	クローゼットの整理収納についてのブログを読む	B1	クローゼットの整理収納をテーマにした簡単なブログを読んで、ライフスタイルについて何を大切に、どんな選択をしているかなど、 <u>主要な情報を理解することができる。</u>
7	悩み相談サイトに投稿された相談とそれに対するアドバイスを読む	B1	悩み相談サイトに投稿された、働き方に関する悩み相談と、それに対する読者からのアドバイスを読んで、 <u>主要な情報を理解することができる。</u>

まず、「①トピック」は、表 2 に示すように、旅行のパンフレットや和食のメニューなどの身近なトピックから、参加者が現実社会で使う可能性が高い「待ち合わせに遅れることへのメッセージ」など、日常的な話題を中心に選択し、参加者の現実社会での読みにつながるものを選んだ。「②学習目標 (Can-do)」は、レベルに沿って、A2 レベルでは、必要な情報を探し出し、内容をおおまかに理解できるようなものとし、B1 レベルでは、重要な情報を理解することを中心に選択した。「③長さ・難易度」は、2 時間のオンライン授業の中で、前作業30分程度、

本作業1時間程度で読める長さとし、分からないことがあっても、文脈や知っていることばかりから類推ができれば読み進められると講師が判断したものを選んだ。

4. 研修デザインの工夫

本章では、研修デザインの工夫について述べる。研修目標である「現実社会で必要となる読解力」の向上のためには、参加者同士での話し合いを通じて、無意識に行っていた自身の読み方や課題に気づくことが必要だと考えた。また、「研修後も自ら学び続ける教師」になるためには、自分に合った日本語学習の方法を知り、今後も継続したいという気持ちを持つことが必要である。そこで、次に述べるように研修をデザインした。

4.1 ふりかえりの重視

参加者が自身の読み方や課題に気づき、読解力向上につなげられるように、各授業後に「読むこと」のふりかえりを、研修開始時と終了時に「読む力」のふりかえりをした(図2)。

「読むこと」のふりかえり (各授業後)		
Q1: 今日のCan-doはどのぐらいできましたか。 ☆☆☆ まだ難しかった ★★★ だいたいできた ★★ 十分にできた	Q2: どんなところが難しいと思いましたか。 <input type="checkbox"/> 1. 漢字が分からない <input type="checkbox"/> 2. 単語を知らない <input type="checkbox"/> 3. 文法が分からない <input type="checkbox"/> 4. 筆者が伝えたいことが分からない <input type="checkbox"/> 5. 文章の構成が難しい <input type="checkbox"/> 6. 内容について知らない <input type="checkbox"/> 7. 内容に興味関心がない <input type="checkbox"/> 8. その他 (書いてください)	Q3: どんなストラテジーを使って読みましたか。 <input type="checkbox"/> 1. スキャニングを行う <input type="checkbox"/> 2. タイトル、イラスト、写真などから、内容を予測してから読む <input type="checkbox"/> 3. 全体の構成、接続詞などから、次にどんな内容が来るのかを予測しながら読む <input type="checkbox"/> 4. 予測が正しいかどうか確認しながら読む <input type="checkbox"/> 5. スキミングを行う <input type="checkbox"/> 6. わからないことばがあってもあきらめない <input type="checkbox"/> 7. その他 (書いてください)
「読む力」のふりかえり <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="background-color: #fff9c4; padding: 5px;"> (研修開始時) 1) プレテストをうけて、読解のどんなところが得意/苦手だと思いましたか。 2) 読むことについて、この研修ではどんなことをがんばりたいですか。 </div> <div style="background-color: #ffe0e0; padding: 5px;"> (研修終了時) 3) この研修では、 ・がんばりたいことができましたか。 ・苦手なところは、よくなりましたか。 ・よくするために、何をしましたか。 </div> <div style="background-color: #e0e0ff; padding: 5px; border-radius: 10px; text-align: center;"> 講師からの フィードバック </div> </div>		

図2 本研修におけるふりかえり

「読むこと」のふりかえりは、授業で読解文を読んだ後に行った。参加者それぞれがどんな読み方をし、どんな課題があるのかに気づくことができるよう、3つの問いかけをし、スプレッドシートに記入してもらった。スプレッドシートは、各参加者が研修期間中も、研修後も確認できるように、ポートフォリオ形式として Google Classroom で参照できるようにした。

「読む力」のふりかえりは、研修の開始時と終了時に行った。研修開始時に設定した自分の到達目標に、研修終了時にたどりついているかどうか、自分の読む力がどう変わったのかを内省するために行った。それに対し、講師が個別にフィードバックのコメントをした。

4.2 読解ストラテジーの意識化

母語で読むときに自然に使っているストラテジーを意識化し、日本語の文章を読むときにも活用することが必要だと考え、『読むことを教える』（国際交流基金 2006）を参考に6つの読解ストラテジーを紹介した（表3）。

表3 本研修で紹介した6つの読解ストラテジー

① スキャニングを行う
② タイトル、イラスト、写真などから、内容を予測して読む
③ 全体の構成、接続詞などから、次にどんな内容が来るのかを予測しながら読む
④ 予測が正しいかどうか確認しながら読む
⑤ スキミングを行う
⑥ わからないことばがあってもあきらめない

ストラテジーの①～⑤は、トップダウン的な読み方のテクニックに関するもの、⑥は読むことへの態度に関するものである。目的をもって必要な情報をピックアップしたり、ざっと内容をつかんだりするようなトップダウン・モデルを中心に授業を進めた。それから、分からないことばがあるとき、予測しながら読み進んだりして、大切なことばを見つけ、それ以外は読み飛ばすように伝えた。

ストラテジーの使用について、一貫性のある学びの場となるように、まず、研修の初日に「ストラテジーの整理」の時間を設け、6つの読解ストラテジーの使用例を示しながら詳しく説明した。各授業では、その読解教材を読むうえで重視するストラテジーを講師から説明した。その後、参加者はストラテジーを使って一人で黙読した。読解教材の答え合わせは、講師が一方的に行うのではなく、グループで話し合いながら、内容の理解確認をし、その際には、どのようなストラテジーを活用したか、グループで話し合うように伝えた。授業の終わりには、図2で示した「読むこと」のふりかえりを参加者一人一人が行い、Can-doの達成度に対する自己評価だけでなく、どのようなストラテジーを用いたかを考えて記入してもらった。

また、3.5で述べたように事前に語彙の意味を調べたり、授業の始めに語彙の意味を全体で確認したりするといったボトムアップ・モデルの読み方も部分的に補いながら、研修を進めた。

4.3 参加者同士の学び合い

読解が困難な主な理由として「長い文を見るだけでやる気をなくす」という読解への苦手意識が挙げられていた。そこで、参加者同士が学び合うことで、読解への苦手意識を減らせるように、次に述べる工夫を行った。

オンライン授業ではまず、一人で文章の重要な部分を読み取ることに力点を置いた。その後、Zoomのブレイクアウトルームで少人数に分かれて、内容理解確認をしたり、お互いの読み方

について話し合いをしたりすることで、参加者の思考を活性化させ、一人では難しいことをグループで解決することを目指した。最後に、グループで話し合ったことを全体で共有した。「個→グループ→全体」という流れを繰り返し進めることで、推測の手がかりの見つけ方や読解ストラテジーの使い方などについて、参加者同士で意見交換をすることにより、学び合いが起こり、自分ひとりで読むときにも学んだことが活かされるように心がけた。

さらに、読解文の内容について話し合うことで自他の文化を理解し尊重する異文化理解能力を促進することも視野に入れ、参加者同士で、筆者の意図をどのように解釈したか、またそれに対してどのように考えたかを授業内で意見交換をする時間も設けた。授業の後にも、読んだものに対する自分の考えや感想を書き、その感想をお互いに読み合いコメントをしたりした。

4.4 自ら学び続ける教師の育成に向けた自習

自分に合った日本語学習の方法を知り、今後も継続したいという気持ちをもつことを目的に、各コマの読解授業終了後、自習の時間を設けた。自習内容は大きく3つに分けられる。

1つ目は、3.5で述べた次回の授業の予習として、語彙や表現などの意味を調べ、練習問題を解くものである。そうすることで、読解への抵抗感を減らすことを目的とした。

2つ目は読解本文に関連した宿題である。読解本文に対する理解を深め、自分とつなげて考えられることを目的に、授業後に本文の内容について自分の意見や感想を述べることを宿題とした。そのほかにも、読解教材のトピックに関連した、自分の興味関心に合う記事を探して読み、感想を書くことも宿題とした。そうすることで、日本語の文章を一人でも読めるという実感を得られること、そして、読むことの楽しさに気づき、今後も継続して読みたいという気持ちを持てるようになることを目指した。

これら2つの自習課題は、研修講師から与えられた宿題や予習であり、「自ら学び続ける教師の育成」において、まだ十分ではない面もある。そこで、講師が選んだ読解文を読むのではなく、参加者の興味関心やそれぞれの日本語レベルに合わせた学習を主体的に行えることを目的に、「もっともっと読もう！」という活動を自習の時間の中に取り入れた。この活動では、読む習慣を身に付けたり、読むことへの苦手意識を少なくするために、無料のオンライン多読教材である「にほんごたどく」「日本語多読道場」⁽⁴⁾を例として紹介し、自習の時間に読んだものを、Google Classroomにある共有記入シート（次ページの図3参照）に記入してもらった。そして、参加者同士、実際に読んだものをシェアすることでお互いに刺激となるように、読んだもののリンクと感想をシェアできるようにした。さらに、シートの共有にとどまらず、自習でどんなものを読んだか、どのように読んだかを、授業内の時間を使って簡単に参加者同士で紹介してもらい、他の参加者の読んでみたいという気持ちにつなげられるようにした。以上、3つの自習の課題を通して、自分に合った学び方を見つけられるように工夫した。

現実社会で必要となる読解力の向上を目指した研修デザイン

名前	読んだもの1 タイトル	感想	読んだもの2 タイトル	感想
	https://www.yomujp.com/jlpt-n3%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB/n3%E3%81%8A%E3%81%84%E3%81%97%E3%81%84%E3%81%8A%E5%B1%97/n3%E3%81%99%E3%81%97/	一番おいしい寿司は世界中で日本にちがいない。すしのないようをよんだあとで、にほんあけで、とくべつなおすもおいしいすしやのばしょもしらせます。やすくて、さがしやすいませをしようかいされて、きかいがあつたら、どこがいいすしやかたすかります。べつにしゆるいとすしのタイプについて、たすかります。それで、いろいろなみせのおいしさはおすしさんがすしのつくりかたのとくいによつて、そのみせはゆうめいである。 	https://www.yomujp.com/jlpt-n2%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB/n2%E5%AF%8C%E5%A3%AB%E5%B1%B1-%E3%81%B5%E3%81%98%E3%81%95%E3%82%93/	その内容をよんだと、日本では一番ゆうめいで、れきしも芸術も大切なものである。そして、富士山にはいっばいきれいなけしきがどこでも、下から上でも、うえからしたでも、うつくしいです。それに、日本人のけいじつかたたちのため、もつとどうきになれます。 
	https://www.yomujp.com/jlpt-n4%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB/n4%E5%AF%8C%E5%A3%AB%E5%B1%B1-%E3%81%B5%E3%81%98%E3%81%95%E3%82%93/	北海道は外国人にとでもにんきがあります。また、北海道では スキーやスノーボードができます。それは楽しそうです。いつかぜひいきたいと思います。 	https://www.yomujp.com/jlpt-n4%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB/n4%E5%AF%8C%E5%A3%AB%E5%B1%B1-%E3%81%B5%E3%81%98%E3%81%95%E3%82%93/	日本で一番高い山は富士山です。高さは3,776メートルです。富士山はきれいな形の山です。素晴らしい山だと思います。 
	https://tadoku.org/japanese/blog/3143/#bd-look-inside	とてもおもしろかったです。私が知らなかった日本の温泉の種類がわかりました。もう読んでは、別府の温泉に行きたいです。いろいろな温泉に入ってみたいです。それに、学生たちにこの情報を伝えたいと思います。 	https://www.yomujp.com/jlpt-n3%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB/n3%E3%81%94%E3%81%BE%E3%81%AE%E5%88%86%E5%88%A5-%E3%81%B6%E3%82%93%E3%81%B9%E3%81%A4/	今、ごみは世界中に大きな問題になっているので、私はゴミ分別が大切とおもいます。タイにもゴミ分別がありますが、人々はゴミ分別がましめではありません。私は日本のゴミ分別が大好きです。日本の分別とは、曜日とごみの種類によって分けることです。ただ、タイにも分別のルールがあります。タイの分別のルールとは、ゴミ箱の色によってごみの種類を分けることです。

図3 授業外に読んだもののシェアから抜粋

4.5 研修後のフォローアップ

研修終了後、研修での学びを参加者がどう活かしているのかを確認し、さらなる日本語能力向上を目指すために、再度参加者を集めたフォローアップ研修を2021年6月12日と13日の2日間、オンラインで実施した。このフォローアップ研修には研修修了者42名のうち37名が参加した⁽⁵⁾。研修時間は、全6時間3コマで、1コマ目にストラテジーの実践として、「JFS 読解活動集」からB1レベルの教材を使用して読解授業を行い、その後、研修終了から1か月で、読み方に変化はあったのか、ふりかえる時間を設けた。2コマ目には、現実社会での読みとして「ペアによる再話」⁽⁶⁾セクションも任意参加で取り入れた。さらに、3コマ目として、「日本語能力試験公式問題集」⁽⁷⁾を用いて「JLPT N3 体験」を行い、ここでもどのようなストラテジーを用いたかをふりかえり確認した。最後に、研修で学んだことを確認し、その学びを教師として自分の授業にどう活かすかということ話し合う時間も設けた。

5. 研修の成果

本研修は、「現実社会で必要となる読解力」の向上と、「研修後も自ら学び続ける教師」の育成を目指して実施した。その成果を、アンケート結果、図2で示した「読むこと」と「読む力」のふりかえりの記述、そして、プレテスト・ポストテストの結果から考察する。

5.1 「現実社会で必要となる読解力」の向上

「現実社会で必要となる読解力」とは、2章で述べたように、「現実社会で必要となるような具体的な場面において、目的に合った読み方をし、その目的を達成できる課題遂行能力」であ

る。研修終了後に Google Forms を用いてアンケートを実施し、修了者42名のうち40名から回答を得た。アンケートでは、「研修目標の達成度」を5段階で評価し、その理由についても簡単に記述してもらった。「目標1 読解力の向上は実感できたか」という問いに対し、「実感できた」37名 (92.5%)、「やや実感できた」2名 (5.0%)、「どちらともいえない」1名 (2.5%)であった。その理由として、「難しいことばがあっても諦めずに、要点を探して読めるようになった」「筆者の伝えたいことは何かと考えながら読めるようになった」という記述が多く見られた。これらの記述からは、3.6で述べたA2レベル「必要な情報を探し出し、内容をおおまかに理解できる」ならびに、B1レベルの「重要な情報を理解できる」どちらも概ね達成できており、課題遂行能力を高められたと言える。

さらに、読み方の変化に気づくことを目的に行ったポストテスト後のふりかえりシートの記述には、ストラテジーを活用することでの効果として、「以前は、細部にこだわっていたが、自分にとって必要な情報を探して読み進められるようになった」という声が多く挙がっており、本研修で目指した読解力の向上が読み取れた。ストラテジーを活用することで、自分が知らない語彙や表現にとらわれず、課題達成に必要な情報を得るような読み方へと変化していることが確認できた。なお、プレテストとポストテストの平均点を比較したところ、プレテストは12点満点中6.7点、ポストテストは8.1点であり、平均点の向上が見られたが、参加者がテストの点数にとられるケースが見られた。この点については今後の課題に述べる。

5.2 「研修後も自ら学び続ける教師」の育成

「研修後も自ら学び続ける教師」になるためには、自分に合った日本語学習の方法を知り、今後も継続したいという気持ちをもつことが必要である。研修後アンケートの「目標2 本研修は自分に合った自習の方法を知り、自身の日本語学習に活かすために、役に立ったか」という問いへの回答は、「役に立った」38名 (95.0%)、「やや役に立った」2名 (5.0%)であった。主な理由としては、「自習教材がおもしろかったので、毎日読み続けたい」「自分の興味関心に近いものを選んで読めたので、これからも続けたい」といったものが挙げられていた。授業外の自習の一つ「もっともっと読もう！」で自分の興味関心に合わせて読み物を選ぶことで、今後自ら進んで読むことへの動機付けになったと言える。

また、ふりかえりの記述からは、「ストラテジー⑥ わからないことばがあってもあきらめない」という態度や気持ちの面での変化が確認できた。具体的には、「長文読解はもう怖くない。長文でもチャレンジしたい」「ストラテジーを活用して読めることで、読書嫌いから読書好きになった」という声が聞かれた。参加者は、一人でも日本語の読み物に取り組むことへの自信をつけ、自分に合った方法で日本語学習を続けたいという気持ちを持つことができたと言える。

さらに、「研修後も自ら学び続ける教師」になるためには、日本語学習者の視点を持って学んだことを、教師として自分の授業に活かすことも必要である。研修終了時のアンケートの自由記述では「ストラテジーを活用して、楽しく面白く読み進められるようになった。自分の授業にも取り入れたい」「多読に自分でチャレンジしてみてももしろかったので、生徒にも紹介したい」「読書が好きではない生徒に対しても、読むことの楽しさを実感できるような授業をしたい」といった声が多く挙がっていた。学習者として読解の授業に参加することで、授業に実践的に活かしたいという教師の視点での学びも確認できた。

6. まとめと今後の課題

以上述べてきたように、本研修は、「現実社会で必要となる読解力」の向上と「研修後も自ら学び続ける教師」の育成を目指して実施した。ふりかえりの重視、ストラテジーの活用、参加者同士の学び合い、授業外での自習といった工夫をすることで、参加者の日本語での読み方や読むことに対する気持ちに変化が見られた。語彙や文法の表面的な理解ではなく、課題遂行のためのコミュニケーションとしての読み方を意識化できたことが明らかになった。また、読むことへの自信をつけ、今後自分の興味関心に合ったものを読むきっかけとすることができた。

一方で、本研修では、3つの課題が残った。第1にプレテスト・ポストテストのありかたである。プレテストは、読解で得意、苦手なところに気づくこと、ポストテストは、自身の読み方が研修を通じてどのように変化したかを確認することを目的とした。しかし、プレテスト後に各参加者が設定した「研修で頑張りたいこと」の記述を見ると、テストの点数の向上ばかりに意識が向いている様子が一部見られた。また、ポストテスト後のふりかえりでも、点数に一喜一憂しているケースが見られた。そのため、点数にこだわるのではなく、目的に合った読み方ができたか、そのための課題は何なのかを内省できるような工夫を今後は取り入れたい。

第2に、自習での読み物の選択肢を増やすことである。授業外での自習で読む教材の例として、多読教材を紹介した。これは、参加者それぞれが、自分の興味関心や日本語のレベルに合わせて教材を選べるというメリットがあったからである。しかし、参加者が研修後も自ら学び続けていくためには、多読教材だけではなく、参加者それぞれが、自身の文脈で日本語をどんな時にどんな目的で読むのかということを考えて取り組んでいくことも必要である。読むことを楽しみ、読むことを通じて学びを深めていくためにも、参加者自身が目的に合わせて読みたいものを自由に読み、参加者同士で読んだものについて話し合う場を設けることを今後の課題としたい。

第3に、異文化理解能力の向上についてである。JF 日本語教育スタンダードは、「相互理解のための日本語」を理念とし、「相互理解のための日本語」を達成するためには、課題遂行能力と異文化理解能力の2つが必要だと考えられている。本研修では、4.3で述べたように参加

者同士で、読み物に対する意見交換をしたり、感想を書いたりすることで、「自他の文化を理解し尊重する」という異文化理解能力の向上も視野に入れていた。しかし、課題遂行能力の向上を中心にし、異文化理解能力の向上は研修目標として明示していなかったため、参加者の多くは、何のために読解文について意見交換をしたり、感想を書いたりするのか、その意図を把握できていなかった。今後は、研修目標に異文化理解能力の向上も取り入れるようにして研修をデザインしたい。

最後に、本研修のデザインから実施を通して、「現実社会に必要な読解力とは何か」「どのように向上できるのか」について研修担当講師も気づきを得ることができた。これからも JFBKK では、「自ら学び続ける教師の育成」を目指し、参加者とともに講師も学び続けていきたい。

[注]

- ⁽¹⁾ 2020年4月オンライントライアルの詳細については、ナリサラー他 (2021) 参照。
- ⁽²⁾ 国際交流基金「みんなの教材サイト」<<https://minnanokyozai.jp/>> (2021年8月8日)
- ⁽³⁾ 本研修の修了条件は、オンライン授業全11コマのうち、80%以上参加していることとした。
- ⁽⁴⁾ NPO 多言語多読「にほんごたどく」<<https://tadoku.org/japanese/free-books/>> (2021年8月8日)
くろしお出版「日本語多読道場」<<https://www.yomujp.com>> (2021年8月8日)
- ⁽⁵⁾ フォローアップ研修は、全員参加を求めたが、家庭や仕事の都合で不参加者が5名いた。
- ⁽⁶⁾ 「ペアによる再話活動」(小河原・木谷 2020) とは、二人の学習者が、読んで理解した内容を相手に伝え合う活動である。「日常生活での読み」、つまり現実社会での読みにつながる活動であるため、フォローアップ研修で取り入れたが、ストラテジーの活用とふりかえりの重視という本研修で目指したものと趣旨が異なったため、任意参加とした。結果、17名が参加した。
- ⁽⁷⁾ 国際交流基金「日本語能力試験公式問題集」<<https://www.jlpt.jp/samples/sampleindex.html>> (2021年8月8日)

[参考文献]

- 小河原義朗・木谷直之 (2020) 『「再話」を取り入れた日本語授業 初中級からの読解』、凡人社
国際交流基金 (2006) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ第7巻 読むことを教える』、ひつじ書房
国際交流基金 (2015) 『まるごと 日本のことばと文化』(初中級 A2/B1)、三修社
ナリサラー トンミー・早川直子・プラパー セントーンズック (2021) 「オンラインによる自律的な学びをめざした研修デザイナータイ中等教育機関の教師研修「NBU オンライントライアル」の実践ー」
『国際交流基金日本語教育紀要』17、75-85
羽吹幸・上原由美子・長坂水晶 (2021) 「課題遂行型教材「JFS 読解活動集」の開発と評価」『国際交流基金日本語教育紀要』17、32-47